MEMENTO=VITA VESTIGIA VITAE

ARCHIVE
// 002

カウンセラー

バーバラ

Counselor
Barbara Rowe
Age / 20

残された
彼らの想いを、
後世に残すために

SECTOR VITA
UNDER GROUND
X - 782.51
Y - 414.62
LAST RECORD
17:00:00
SIGNAL STATUS
ALIVE



PROFILE

ユニオンの兵士および託生者の情報記録を管理する担当者。戦闘記録や個体データの整理に加え、戦場に立つ者たちの精神を支える役割も担っている。

キャラクターブック

ストーリー （公開情報）

数百年前、アンドロイド産業は飛躍的な発展を遂げた。
開発者のアンディ博士は、人類とアンドロイドが共存する夢を見て、人間に限りなく近いアンドロイドを生み出した。だが、アンドロイドはやがて思想の違いから二つの派閥に分かれる。

人類との共存を望む穏健派と、人類そのものを否定し、滅ぼすべき存在とみなす過激派である。
穏健派アンドロイドは、人間と見分けのつかない外見、そして、共存を望む平和な意志。
彼らは人間との争いを避けるために、人類の前から姿を消した。

過激派アンドロイドは、人間の外見を捨て、強硬な意志を持ち、人類との戦争を選んだ。
激しい戦いの末、この戦争は人類の勝利で終結したと記録されている。
戦争の終結後、長い沈黙を経て、穏健派アンドロイドは再び人類の前に姿を現した。

そして 2XXX 年――人類と穏健派アンドロイドの間で、ついに正式な共存協定が結ばれた。
そして、人類と穏健派アンドロイドによる連合組織《ユニオン》が発足する。
だが、その瞬間を境に、世界は再び崩れ始めた。

協定の成立、そしてユニオンの結成とほぼ同時に、過激派アンドロイドによる全面攻撃が開始されたのだ。――敗北したはずの過激派アンドロイドたちは、滅びていなかった。
彼らは長い年月、影に潜みながら、その機会を窺っていたのだ。

穏健派アンドロイドはユニオンの一員として人類に協力し、過激派アンドロイドとの《第二次アンドロイド戦争》に突入した。その戦いの中で大量破壊兵器が使用され、地上環境は急速に汚染された。
都市は崩壊し、多くの人命が失われる。生き残った人類は、わずか一億にまで減少した。

限られた資源、減り続ける兵力。この戦争を生き延び、そして勝利するために、
ユニオンは新たな生命を創造するという選択に踏み込む。

研究施設《セクター・ヴィータ》。
そこは、ユニオンによって造られた、生命を再構築し、記憶を継承するための領域。
そこで生み出されたのは――人類の意志を宿す、新たな生命《託生者（たくせいしゃ）》だった。

登場人物　（公開情報）



統括官 / ヘクター・ソリス（NPC）：Hector Solis

人間。４５歳。男性。

セクター・ヴィータにおける最高責任者。一般的に『**統括官**』と呼ばれている。主に戦闘指揮を担い、兵士一人ひとりの命を背負う立場として、可能な限り犠牲を抑えることを責務としてきた。彼にとって、穏健派アンドロイドの生命もまた、人間と同等の価値である。しかし、人類存続のためであれば、冷酷な決断を下すことも厭わない覚悟を持っていた。



ルピナス（NPC）：Lupinus

穏健派アンドロイド。製造から数十年が経過している。女性型。

セクター・ヴィータでは統括官の補佐を務めると同時に、穏健派アンドロイド全体を束ねる指導者的立場にある。主に施設の管理・制御を担う。人類との共存を望む穏健派アンドロイドの意志を受け継ぎ、その象徴として創られた存在。

数年前に身体を損傷したが、資源不足により修復は不可能。

そのため、現在は生命維持ポッドの中で過ごしており、連絡を取る際はモニター越しに通信を行う。



研究者 / アレク・ヴァレン：Alec Valen

４５歳。男性。一人称は「わたし」

《託生者創造計画》を主導した人物であり、計画の立案から実行までを担った科学者。託生者の創造技術と倫理構築、その両面に深く関わっている。



カウンセラー / バーバラ・ロウ：Barbara Rowe

２０歳。女性。一人称は「わたし」

ユニオンの兵士および託生者の情報記録を管理する担当者。

戦闘記録や個体データの整理に加え、戦場に立つ者たちの精神を支える役割も担っている。

登場人物　（公開情報）



オペレーター / クララ・ヴァレン：Clara Valen

２０歳。女性。一人称は「わたし」

セクター・ヴィータのオペレーターを務める非戦闘要員。

戦闘能力は持たないが、統括官の指揮のもと、戦場に展開する兵士へ情報・命令を伝達し、後方から作戦を支えている。



突撃兵 / ディーン・カルダー：Dean Calder

40歳。男性。一人称は「俺」

戦闘能力を備えた最初の託生者として誕生し、数多の戦場で成果を残してきた存在。セクター・ヴィータの象徴的戦力であり、勝利の要でもある。

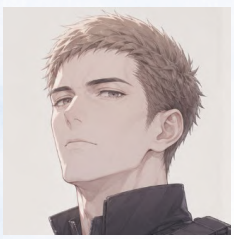


遊撃兵 / エヴァ・ソリス：Eva Solis

２２歳。女性。一人称は「わたし」

統括官の娘として生まれ、人間の兵士として前線で戦果を重ねてきた。

託生者となった後も、その選択を疑うことなく、人類のために戦い続けている。



工作員 / フリッツ・クライン：Fritz Klein

２０歳。男性。一人称は「俺」

前線で戦うことは少なく、主に偵察や潜入など、影から戦場を支える任務を担っている。その判断と行動は、多くの戦況を左右してきた。



参謀 / グレイ・ノア：Gray Noah

２２歳。男性。一人称は「僕」

極めて高い情報処理能力を備え、変化する戦場の状況に即応できる。統括官の指示が届かない現場においても、自ら判断を下し、その選択によって多くの仲間の命を救ってきた。

キャラクター背景

“恐怖”という感情を、初めてはっきりと感じたのは、私が６歳の頃だった。
その頃、私は小さな青い鳥を飼っていた。物心ついたころから一緒にいた鳥だ。名前はソラ。

その日、突然、部屋の奥から大きな物音が聞こえた。驚いて廊下を走り、扉を開ける。
部屋の中で、ソラが激しく鳴いていた。ケージの中で羽をばたつかせ、必死に逃げようとしている。
理由はすぐにわかった。ケージの前に、黒い影。野良猫だった。
いつの間に入り込んだのか、猫は低く身をかがめ、鋭い目でソラを見つめている。
細い隙間から前足を差し込み、何度もケージを叩いていた。ソラは羽をばたつかせ、鳴き続けている。
私は一歩踏み出した。助けなきゃ。そう思った。けれど、その瞬間、猫がこちらを振り向いた。
黄色い目が、じっと私を見つめる。喉の奥で、低い唸り声が鳴った。私は動けなかった。
心臓が強く打つ。足がすくむ。怖かった。手を伸ばせばいい。クッションを投げればいい。
――それだけなのに、体が動かなかった。
その間にも、猫の前足がケージの隙間に入り込む。金属の柵が大きく揺れた。
ソラの鳴き声が、急に大きくなる。私は、ただ立っていた。やがて、大きな音がした。ケージが倒れ、
青い羽が舞う。次の瞬間、ソラは窓の隙間から外へ飛び出す。猫もすぐに、その後を追った。

私はやっと足を動かし、窓の外を見た。けれど、ソラの姿はどこにもない。
床には、青い羽がいくつか落ちていた。私はそれを拾いながら、ずっと同じことを考えていた。
どうして、私は動けなかったのだろう。……気がつけば、涙が溢れていた。
もし、私が動いていれば。ほんの一歩、踏み出していれば。ソラは助かったのだろうか。
動けなかった理由は、わかっていた。“怖かった”からだ。
もし野良猫が、私を襲ったら。そう考えた瞬間、足が動かなくなった。
――もし、“恐怖”という感情がなかったなら……私は、ソラを助けられたのだろうか。

10 年前（10 歳）
2XXX 年――人類と穏健派アンドロイドの間で、ついに正式な共存協定が締結された。
両者による連合組織《ユニオン》が発足する。だが、それは同時に、第二次アンドロイド戦争の幕開けでもあった。過激派アンドロイドとの全面衝突。多くの生命が失われ、アンドロイド同士が保有していた大量破壊兵器によって、地上は急速に汚染されていった。

私は政治家の娘として生まれ、守られた環境で育っていた。外の世界では、戦争が起きているらしい。
ニュースでは、毎日のようにその話が流れていた。けれど、私にはどこか遠い出来事のように感じられた。私にとっての危機といえば、幼い頃に体験した野良猫のことくらいだったからだ。
母はいつも言った。「大丈夫よ」そう言って、私を抱きしめてくれた。
けれど――その腕は、いつもわずかに震えていた。

私は両親に連れられ、統合生存圏へと避難した。
そこは戦争を生き延びた人類が集められ、生活のすべてが一元管理される巨大な居住区だった。
外縁では、人類を守るための防衛線が今も維持されている。私たちが暮らしていたのは中央付近。
統合生存圏において一番安全な区域だと教えられていた。

やがて、穏健派アンドロイドが秘密裏に建設していた地下シェルターが、人類へ提供されることになった。地上の劣悪な環境に耐えられない人々から、優先的に移住が進められていく。
私たちの家族は、第一次移住者だと聞かされていた。
「お父さんのおかげよ」母はそう言って、安堵したように微笑んだ。
父は連合組織《ユニオン》の要人にあたる立場だった。
そのため、私たちは早く地下へ移ることができたのだ。
けれど父は、浮かれた様子はなかった。むしろ、怒ったように言っていた。
「奴らは穏健派アンドロイドとの共存を謳っているが、あまりにも彼らを軽視しすぎている」
私はアンドロイドを見たことがなかった。けれど、人とまったく同じ姿を持ち、同じように考える意志を持つ存在だという。そんな存在に、私はいつか会ってみたいと思っていた。

そして、移住の日。統合生存圏の中心にそびえ立つ搬入エレベーターの前には人があふれ、百人以上を収容できるという巨大な箱が、鈍い音を立てながら上下していた。周りにいるのは、要人と呼ばれる偉そうな大人たちばかりだった。父と同じように《ユニオン》の中枢に関わる人々や、その家族たちだ。母は少し誇らしそうにしていたが、私はその空気がどこか居心地悪く感じられた。

与えられた新しい住居は、以前の家よりもずっと狭かった。壁は近く、天井も低く感じられる。それでも大人たちは口々に言った。「これで安全だ」きっと、自分たちにそう言い聞かせていたのだと思う。
やがて、第一次移住者の移住は完了した。

その日は、第二次移住者が地下シェルターに降りてくる、と聞かされていた。
私が部屋で勉強していると、外から大きな破裂音が響く。静寂の中、空気が震え、床がわずかに揺れた。私は驚いて、窓から外を眺めた。近くでは、何も変化はなく、遠い場所で何かが起きたようだ。

母は私の元へ走ってきた。驚いて母の手を握ると、父が慌てた様子で部屋に駆け込んできた。
しかし、音は止まらなかった。遠くで鳴っていたはずの破裂音が、少しずつ近づいてくる。
母は、それが銃声だと言った。乾いた音が、短い間隔で繰り返される。誰かが走る足音。
そしてまた、銃声。悲鳴が聞こえた。短く、切れ切れの声。すぐに銃声がそれをかき消した。
理由も分からないまま、私は自分の体が震えていることに気づいた。
そして突然、銃声が止んだ。――静かだった。さっきまでの騒音が嘘のように消えている。

そのときだった。父の持つ通信機から声が聞こえた。
「全員に通達。ターゲットを捕捉。…一人のようです」父は驚いたように通信機を切った。
「……すまない」低く唸るように、父が呟いた。

やがて、どこからか低い機械音が響いた。父が窓の外を見る。
地下シェルターの天井や壁のあちこちで、重い金属が動く音がした。装甲がゆっくりと開いていく。
そこから現れたのは、黒い銃身――機関銃だった。
「……防衛システム」
父の顔が、強張った。――次の瞬間だった。轟音が響いた。耳を裂くような連射音が、地下空間に鳴り響く。窓の外では、人々が一斉に倒れていった。悲鳴が上がる。誰かが逃げようと走る。
だが、銃弾は容赦なくその背中を撃ち抜いた。人が崩れ落ちる音が、次々と重なる。
私は動けなかった。何が起きているのか理解できなかった。
ただ、目の前の光景を見ていることしかできなかった。
そのとき、父が私の肩を強く掴んだ。「伏せろ！」母が私を抱き寄せる。強く。苦しいほどに。
父は私たちの前に立った。庇うように。
「私の後ろに！」
怒鳴るような声。だが、その奥には震えが混じっていた。

――次の瞬間。何かが弾けるような音がした。母の体が大きく揺れた。抱きしめる腕が、さらに強くなる。
「……っ！」声にならない声。生暖かいものが、私の頬に飛び散った。何が起きたのか分からなかった。ただ、赤い色だけが視界に入る。目の前で、父の体が揺れた。母の体から、力が抜けていくのが分かった。抱きしめていた腕が、少しずつ滑り落ちる。私は声を出せなかった。身動きも取れなかった。ただ、目の前で起きている現実を、逃げ場もなく感じ続けていた。気がつけば、私は意識を失っていた。

目を覚ましたとき。私を覆うように、父と母は血を流して倒れていた。
「生存者がいるぞ」誰かの声がした。震える体を、知らない腕がそっと包み込んだ。

私を助けてくれたのは、統括官と呼ばれる男性だった。
彼から知らされたのは、私が《シェルター制御喪失事件》の生存者だという事実。
そして彼は、事件の詳細を語った。
地下シェルターの防衛システムが過激派アンドロイドに掌握され、避難していた第一次移住者や第二次移住者のほとんどが、一瞬にして命を落としたのだという。
そして、生き残った私に――両親は、文字通り「壁」となって守ったのだと告げられた。私は施設に保護され、孤児院で暮らすことになった。そこには、戦争で家族を失った子どもたちが多くいた。

８年前

父はよく言っていた。「自分に胸を張れる人間になれ」と。

――あの日から二年。私は、そんな人間にはなれていなかった。今は、自分の心さえわからない。

誰かと話すのも億劫で、なるべく人を避けて過ごしていた。

孤児院の中でも、私は一人でいることが多かった。そんなある日、統括官が孤児院を訪れた。

彼は、地上のセクター・ヴィータで戦う人だった。

それでも時折、こうして私たちの様子を見に来てくれる。その日は、誰かを連れていた。

「初めまして。私はルピナスと言います。あなたのお名前は？」

私の目線に合わせるようにしゃがみ込み、彼女は優しく微笑んだ。

ルピナスはアンドロイドだと、教えてもらった。その表情は人と変わらない。私は少し怖かった。

過激派や、穏健派、私にとってアンドロイドの違いなどわからなかったから。

……私は、その場を離れようとした。だが、統括官に呼び止められる。

「ルピナスに、孤児院を案内してあげてくれないか」

断る理由も見つからず、私は黙って頷いた。

連れていったのは、私がよく一人で過ごしていた場所。孤児院の隅にある、小さな庭だった。

だが、その日は先客がいた。私よりも小さな男の子が、ベンチに座って俯いている。

最近、父親が兵士として前線に出て、ここに預けられた子だ。気まずさを感じて、私は別の場所へ行こうとした。だが――ルピナスは、静かにその子へ歩み寄った。

何も言わず、隣に座る。少しの間を置いて、やさしい声で問いかけた。

「どうしましたか？」

男の子は、顔を上げた。そして、小さく、絞り出すように言った。

「……お父さんが、死んじゃったって……」

ルピナスは、何も言わなかった。ただ、話を聞いていた。

そっと、その子の手に触れる。その瞬間、男の子の表情が崩れた。我慢していたのだろうか、涙が溢れる。ルピナスは、何も言わない。ただ、その隣に座り続けていた。時間だけが、ゆっくりと流れていく。

やがて、泣き声が少しずつ落ち着いていった頃。ルピナスはポケットからハンカチを取り出し、そっと涙を拭った。男の子は、小さく「ありがとう」と言って、その場を去っていった。

ルピナスは、特別なことはしていなかった。慰めの言葉を並べたわけでもない。何かを解決したわけでもない。ただ、隣にいて、話を聞いていただけだ。それでも、あの子は少しだけ前を向いていた。

……私は、それが羨ましかった。私も、できるなら前を向きたかった。

そのときだった。背中から、そっと抱きしめられる。

驚くよりも先に、温もりが伝わってきた。……あたたかい。

――母に抱きしめられていた頃の記憶が、よみがえる。気がつけば、涙が溢れていた。
私は、何も考えられなくなっていた。ただ、溜め込んでいたものを、言葉にして吐き出していた。
不安も、寂しさも、怖さも。ルピナスは、何も遮らなかった。
ただ、ずっと聞いてくれた。ずっと、抱きしめてくれていた。
人の心は、不思議だと思う。悲しみが消えるわけじゃない。失ったものが戻るわけでもない。
それでも――誰かがそばにいるだけで、ほんの少しだけ、軽くなる。

ルピナスと会うたびに、私は少しずつ元気を取り戻していった。
きっと、同じように苦しんでいる人は、他にもいる。だから、思った。
もし――ルピナスのように、誰かの心を、ほんの少しでも支えられる方法があるのなら。
私は知りたい……。そうすれば、父の言った、自分に胸を張れる人間になれるのだろうか。

その日、私は車椅子に座る少女を見つけた。少し、寂しそうに見えた。私は、ルピナスのように、
彼女に寄り添ってみたいと思い、勇気を出して声をかけた。彼女はクララと名乗った。
「ここ、迷路みたいでしょ？案内してあげる」そう言って、私は車椅子を押し始める。
「こっちからね、庭に出られるんだ」
歩きながら、彼女が退屈しないように、ここでの暮らしのことや、好きな食べものの話をした。
彼女は私と同い年だった。気がつけば、クララは笑っていた。私は、それがとても嬉しかった。

クララは、父の付き添いで孤児院に来ているのだと言っていた。
何度か会ううちに、彼女と過ごす時間は、いつの間にか私にとって特別なものになっていく。
クララの姿を見つけると、私は自然と彼女のそばへ向かっていた。彼女と話している時間は、とても楽しい。孤児院には、友達と呼べるような存在はいない。だからこそ、クララに会える日を楽しみにしていた。やがて話題は、将来の夢へと移っていく。
「私、勉強するの好きなんだ。だから大人になったら……誰かの役に立つことをしたい。
心とか、気持ちとか……そういうのを助ける仕事」
ルピナスと出会ってから、私はそんなふうに思うようになっていた。それなら、クララはどうだろう。
私は彼女に、将来の夢を聞いてみた。けれどクララは、すぐには答えなかった。
遠くを見つめたまま、何か考え込んでいるようだった。そのとき、私はふと用事を思い出した。
「また来るよね？お話の続きは、また今度ね」
そう言い残して、私は庭を後にした。

その翌週、ルピナスとクララが孤児院へ来ていた。私はルピナスを連れて、クララの元へ向かった。
そして二人にお互いのことを紹介する。私たちはそのまま、三人で話をしていた。
ふと、前に聞きかけていた話を思い出す。将来の夢の話だ。クララはゆっくりと顔を伏せた。

「私ね……二十歳まで生きられないの」
私は言葉の意味をすぐに理解できなかった。
「心臓に病気があって……だから、私に将来なんてない」
クララは、自分の胸を押さえると涙を流した。私は慌ててポケットからハンカチを差し出す。
「私ね……毎日、不安なんだ。眠るたびに、残りの時間が減っていく気がする。朝が来るたびに、終わりが近づいてくるみたいで……。最近ね……生きていることが怖いの」
その言葉に、胸が締めつけられた。
「いっそ……早く終わっちゃったほうが、楽なのかなって」
その言葉を聞いた瞬間、胸の奥が熱くなった。
「そんなこと言わないで！」
気づいたときには、私は叫んでいた。クララが驚いて私を見る。私は知っている。大切な人がいなくなることを。そのあとに残る、どうしようもない孤独を。
「私ね、お父さんとお母さんが死んだの。今でも、ずっとつらい。大切な人がいなくなるのって、本当につらいの。せっかくお友達になれたのに…クララちゃんがいなくなるのは、嫌だよ」
クララは黙っていた。私は、その顔を見て気づいた。
クララは――怖がっている。“恐怖”に押し潰されそうになっている。
そして私は、その感情を知っていた。

青い鳥を助けられなかったとき、動けなかった。怖かったからだ。
シェルターで、死ぬ直前に父と母は震えていた。怖かったからだ。
怖いから、人は動けなくなる。怖いから、人は苦しむ。怖いから、人は……。
私は強く思った。こんな感情は、なくなればいい。私は顔を上げた。
「私、決めた。恐怖心を消す研究をする！クララが怖くなくなる方法、私が見つける」
言葉は、自然と出てきた。それが、幼い私が初めて決めた覚悟だった。



そう口にしたものの、胸の奥に小さな不安が残っていた。本当に、そんなことができるのだろうか。
私はただの子どもだ。何をすればいいのかも、どこから始めればいいのかも分からない。
そのとき、ルピナスが静かに口を開いた。
「私が、あなたのお手伝いをします。あなたの想いが実現できるように。それが、私の……」
ルピナスは小さく首を振った。そして、いつもの柔らかな表情に戻った。
「セクター・ヴィータへ行きましょう。あなたの研究を始めるには、そこが一番いい場所です」
彼女は、そっと私の手を握ってくれた。

やがて、私はセクター・ヴィータへ移ることになった。新しい生活が始まる。そして、ちょうど同じ頃。
クララの家族も、その施設へ移住した。クララの父と母もまた、セクター・ヴィータで研究をしているのだという。クララの病気を治すための研究だと、あとで教えてもらった。

5年前
私はまず、“恐怖”という感情を理解しようとした。脳科学、心理学、神経の働き、条件反射、トラウマ。
人はなぜ恐れるのか。どうしてその感情が生まれるのか。
本を読み、研究資料をルピナスに探してもらいながら、私は調べ続けた。
最初に分かったのは、恐怖が生きるための反応だということだった。危険を感じたとき、人の体は自然に身を守ろうとする。逃げるか、戦うか。それは、生き残るために備わった感情だった。
――幼い頃、野良猫を前にして体が動かなかった。あのとき私が感じた恐怖は、きっとそれだったのだろう。けれど、それだけでは説明できない恐怖もあった。
クララの恐怖だ。彼女は、まだ起きてもいない未来を怖がっている。それは、本能の反応ではなかった。
調べていくうちに、私は一つのことに気づいた。人は、過去の記憶や知識をもとに未来を想像する。
そして、その想像が恐怖を生む。クララは、自分に未来が長く残されていないことを知っている。
だからこそ、その終わりを思い浮かべるたびに、恐怖を感じてしまうのだ。恐怖とは、本能に根ざした感情だ。だが、過去の記憶や経験によって強く結びつき、人の中に残り続ける。
一度怖いと感じた出来事は、簡単には消えない。その記憶は、何度でも恐怖を呼び起こす。
もし――本能と記憶。恐怖を生み出すその二つを切り離すことができたなら。
人は、恐怖から解放されるのではないだろうか。

私は、ルピナスに相談した。自分の理論を伝えた。
しばらく黙って聞いていた彼女は、やがて静かに言った。
「理論上は可能です」私は顔を上げた。
「記憶は固定されたものではありません。強い刺激や、繰り返しの暗示によって変化します」
胸が高鳴った。だが、ルピナスは続けた。
「ですが、その方法は――人の意志に深く干渉する可能性があります」

その意味を考えた。記憶を、恐怖の理由を…消す。それは――洗脳に近い処置だった。
私は少し戸惑った。本当に、それは正しいことなのだろうか、と。

私がそのことを考えていたときだった。廊下の向こうから、車椅子を押す音が聞こえた。
クララだった。久しぶりに会った彼女は、どこか暗い顔をしている。彼女は言った。
「私ね……実験に参加することになったの」
《託生者創造計画》。そう呼ばれる研究だと聞かされた。
託生者。人間と同じ構造の身体を新しく生成し、心臓の代わりにアンドロイドのコアを組み込む。
そして記憶をそのコアに移すことで、新しい身体で生き続けることができるという。
正直、私は戸惑った。ひどい話だ。だが、クララは静かに言った。
「お父さんを、信じてみたいから」少しだけ笑う。そして、彼女は自分の足を見た。
「それにね。一度くらい…歩いてみたいんだ」その声の奥に、かすかな震えがあった。
私は分かった。クララは、まだ怖がっている。それでも前に進もうとしているのだ。
私は迷いを押し込めた。洗脳に近い方法だとしても、それで恐怖を消し去ることができるなら。
「恐怖心を消す研究。順調なんだ」そして伝えた。
「だから安心して。クララが怖がらなくていいように、私がちゃんと間に合わせる」
その言葉を口にしたとき、私は、自分の進む道を決めていた。

３年前
やがて、ルピナスの協力のもと、私の理論は形になった。
その研究に興味を示したのが、統括官だった。ある日、彼は私に言った。
「戦場で戦う兵士たちの恐怖を消し去ることはできないだろうか」
私は驚いた。だが、すぐにその意味が理解できた。戦場では、兵士たちは常に死と隣り合わせだ。
恐怖は判断を鈍らせ、ときには動きを止めてしまう。
もしその恐怖を取り除くことができれば――兵士たちは、もっと自由に戦える。私は頷いた。
その提案に、迷いはなかった。むしろ胸が高鳴った。自分の研究が、誰かの役に立つかもしれない。
彼らの命を助ける力になるかもしれない。そう思うと、私は嬉しかった。

実験部隊として志願した被験者は数十名。戦場に出る兵士たちだった。
アンドロイドも志願してくれたが、彼らについてはルピナスが直接コアの記憶に処置を施すことで対応できた。処置を受けた兵士たちは、驚くほど静かだった。出撃前の兵士に見られるような強張りも、震えもない。ただ淡々としていた。作戦は開始された。
任務は一つ。過激派アンドロイドの制圧。
兵士たちには状態を記録するためのインカムが装着されており、私は作戦本部でその記録を聞いていた。最初は順調だった。「敵影確認」「交戦開始」「前進」声は落ち着いている。だが、すぐに異変が現れた。

最初の被弾だった。乾いた銃声のあと、肉を撃ち抜く鈍い音が響く。
普通ならここで身を伏せる。遮蔽物に退く。だが兵士は静かに報告した。
「負傷した。痛みは激しいが、任務は継続できる」そして、そのまま前進した。

その後も記録は続いた。爆発。崩れる瓦礫。倒れる兵士。それでも部隊は止まらなかった。
退くという判断が、そこには存在しなかった。仲間が倒れる。それでも進む。誰も振り返らない。
誰も庇わない。ただ任務を遂行する。それだけだった。
記録の最後に残っていたのは、一人分のインカムだけだった。
統括官が命じた。「撤退しろ」
返答は静かだった。
「任務継続可能です。必ず過激派アンドロイドを制圧します」
次の瞬間、爆発。通信は途絶えた。帰還者は、一人もいない。結果は、散々だった。

それでも私は諦めなかった。次こそは、と。だが、何度試しても結果は同じだった。
恐怖を失った兵士には、いくつかの共通点があった。敵の火力が圧倒的になっても退かない。
仲間が倒れても庇わない。ただ任務を遂行する。その覚悟だけが、彼らを突き動かしていた。

そして、その部隊の中には帰還しなかった兵士もいた。当時は戦死したものだと考えられていた。
だが後になって、その兵士は生きていたと、知らされた。過激派アンドロイド側に投降していたのだ。
ユニオンを裏切ったのである。そこには、裏切りへの恐怖も存在しなかった。

ある日、別の戦闘記録を目にした。処置を受けていない兵士たちの戦いだった。
銃声が響く。爆発が地面を揺らす。そのとき、一人の兵士が叫んだ。
「下がれ！」次の瞬間、彼は仲間を突き飛ばした。直後、銃弾がその場所を貫く。
もし突き飛ばしていなければ、その兵士は死んでいた。突き飛ばした兵士はすぐに身を伏せる。
呼吸は荒く、声も震えていた。彼は恐れていた。銃弾を。爆発を。死を。
それでも彼は、仲間の前に立っていた。

別の記録では、撤退命令が出ていた。敵の火力は圧倒的だった。
兵士たちは負傷した仲間を引きずるようにして後退していた。置いていかないために。
声は震えていた。それでも彼らは戻ってきた。その記録を見ながら、私はようやく気づいた。

恐怖があるから、人は退く。恐怖があるから、人は生きようとする。
恐怖があるから、人は仲間を守ろうとする。
そのとき、ふと思い出した。地下シェルターでの、あの日のことを。

銃声が近づいてきたとき、父と母の体は震えていた。私はずっと、それを弱さだと思っていた。
恐怖に震えているのだと。でも、今なら分かる。
きっと、父と母が恐れていたのは、家族を失うことだった。愛する人を守れないかもしれない。
この子が死んでしまうかもしれない。その思いが、二人を震わせていた。
“それでも”——二人は私の前に立った。私を守るために。そのとき、私は理解した。
人は、大切なものを守ろうとするとき、恐怖から逃げるのではない。恐怖を抱えたまま、それでも前に立つ。そしてときには——自分の命さえ差し出して、守ろうとするのだ。

私は、恐怖という感情を取り除くことが、人を救う方法だと思っていた。けれど、それは違った。
その感情を失ったからといって、人は強くなるわけではない。むしろ、人は恐怖を抱えながら生きている。ならば、私にできることは何だろう。それは、恐怖を消すことではなかった。
なら、恐怖を抱えたままでも生きていけるように、その人のそばにいることかもしれない。
痛みを理解しようとすること。私は、そういう仕事がしたいと思った。人の心に寄り添う仕事を。

私は、この実験が失敗だったと悟った。統括官に報告し、装置の使用停止を求めた。
統括官は私の判断を受け入れてくれた。
そして私に残されたのは、被験者となり命を落とした兵士たちの事後処理だった。

その日、統括官は遅くまで仕事をしていた。机の上には、一冊の分厚いファイルが置かれている。
そこには、実験に参加した兵士たちの名前が、一人ずつ記録されていた。
私はページをめくりながら、ふと気づく。この記録は、それだけではない。
統括官は、これまで戦争で命を落としたすべての兵士の名前を、一人ずつ書き残していたのだ。
「戦争が終わったとき、彼らのことを忘れないためだ」統括官は静かに言った。
「彼らはユニオンのために戦った。だから、その事実は記録に残しておかなければならない」
その言葉を聞いたとき、私はようやく理解した。統括官は、その身一つで、すべての兵士の死を背負っているのだ。彼らの遺志を残すこと。それが、ここで生き残った者の役目なのだと。
……ならば——その最期もまた、正しく残されるべきではないのか。私は、記録を書き換えた。
“勇敢に戦い、戦死した”——そうではない。
“恐怖を失い、判断を誤り、それでも任務を続け、死んだ”
その事実を、私は残そうとした。
統括官に提出したとき、彼は静かに口を開いた。
「やめておけ。その兵士は、どう記録されている」私は答える。
「……ユニオンのために、勇敢に戦い、戦死したと。でも、それは……真実ではありません。彼は恐怖を失い、判断を誤り……結果として——」
「無様に死んだ、と記録するのか」統括官に言葉を遮られた。

「その名の横に、永遠に残ることになる。“恐怖を失い、愚かにも死んだ兵士”と」
「それが、お前の言う“真実”か？」
私は言葉を失った。……違う。そう思った。だが、何が違うのか、言葉にならない。統括官は、続けた。
「その遺族に、どう伝える？あなたの父は、私の研究によって恐怖を失い、“正常な判断ができず、死にました”と」胸の奥が、強く締め付けられる。統括官は、視線を外し、静かに言った。
「真実とは、ときに人を傷つける。それが、残された者にとってもそうであるなら――その罪は、生き残った我々が背負うべきだ」統括官は、再び記録へと視線を落とした。
「その兵士に、その罪を背負わせるべきではない」
私は、ようやく理解した。真実を突きつけることもまた、必ずしも人を救うわけではないのだと。
それでも。私は、この記録を残し続けようと思った。彼らが、確かにここに生きていたことを。
恐怖と向き合い、それでも前に進んだことを。その名前を、未来に残すために。
ただし――その“最期の形”は、簡単に決めるべきものではない。
その重さを、背負う覚悟がある者だけが、触れていいものなのだと――私は、そう理解した。

ちょうどその頃、《託生者創造計画》の実験中に事件が起きたという報せが入った。
そして――クララは託生者となった。

私はすぐに、クララの部屋を訪ねた。扉を開ける。そこには、彼女がいた。
そして、私に歩く姿を見せてくれた。まだ、その体に慣れていないのか、ゆっくりと。
一歩、続けて一歩と。その姿を見た瞬間、胸の奥に溜まっていた不安がほどけていく。
「よかった……本当に」
少し話をしたが、クララの中身は何も変わっていない。
託生者となった後でも、彼女はクララのままだった。
しばらくして、クララが話題を変えるように聞いてきた。恐怖心の研究。
彼女が実験を受けるとき、不安にならないようにするためだと言っていたものだ。
「結局、必要なかったね」クララは冗談めかして言った。私は一瞬、言葉に詰まった。
「……私、間違ってた」そして、小さく答える。
「恐怖っていう感情は……消していいものじゃないんだと思う。人が生きるために、必要なものなんだよ」少し間を置いて、私は続けた。
「だから私、研究の方向を変える。人の心に寄り添う仕事をしたい。カウンセラーになろうと思うんだ」
クララは、安心したように笑った。その顔を見て、私は少しだけ救われた気がした。

私は、カウンセラーとして兵士たちに寄り添うことにした。
彼らが恐怖を抱えながら戦っているのなら、その心を理解することが、私の役目だと思ったからだ。
最初に面談したのは、統括官の右腕と呼ばれる兵士――ジェイだった。

【カウンセリング記録：ジェイ・マーサー】



ジェイは過去に、過激派アンドロイドによって両親を殺されている。
彼が戦場に立つ理由は、復讐だ。彼の言葉の奥に、強い憎しみがあった。
私は、その感情の奥にあるものを知っている。恐怖だ。人は、強い恐怖を感じたとき、それに対抗するために怒りを生み出す。
そして、その怒りが長い時間をかけて積み重なったとき、やがて憎しみに変わっていく。もし――私が研究していたあの処置があれば。ジェイの心を支配しているその憎しみも、消すことができたのだろうか。
そして、もう一つ。ジェイは、統括官の古くからの友人でもあった。だからこそ彼は、統括官が兵士の死を背負いすぎていることを誰よりも心配していた。私は知っている。統括官が、死んだ兵士一人ひとりの記録を残していることを。その重みを、ジェイも感じているのだろう。もしできるなら――ジェイと共に、統括官を支えることができたら。
私は、そう思っていた。

【カウンセリング記録：ケイ・アーデン】



ケイは、一言で言えば、お調子者だった。
おしゃべりが好きで、自分のことや仲間のことを楽しそうに話す。彼の言葉のほとんどは、部隊の話だった。自分たちの部隊長は、アンドロイドの中でも最強の戦闘技術を持っているのだと、誇らしげに語っていた。
この部隊なら、きっと戦争を終わらせることができる。
そして戦争が終わったとき、自分たちは英雄になれるのだと。
だが、話を聞いているうちに、私は別の感情にも気づいた。
彼は仲間のことを、とても心配していた。その理由はすぐにわかった。その仲間には、地下シェルターで子どもが待っているのだ。愛する者を持つ兵士は、恐怖を知る。守るべきものがあるとき、人はそれを失うことを恐れる。私は、似たようなケースを知っていた。

過去に、過激派アンドロイドに子どもを人質に取られた兵士がいた。
その兵士は過激派に命令されるがまま、仲間を殺し続けた。そうしなければ、子どもが殺されるからだ。だが結局、人質は殺され、その兵士は自ら命を絶った。彼にとって、子どもこそがすべてだったのだろう。
ケイの話を聞きながら、私は思った。彼の部隊の仲間とも、一度話してみたい。もし可能なら、次はその仲間も連れてきてほしいと伝えた。

【カウンセリング記録：アイ・ソレル】



アイは、統括官の二人の娘が所属する部隊の部隊長である。
アンドロイドの兵士として、長いあいだ統括官と行動を共にしてきた。
面談の中で、アイは二人のことを「妹のような存在だ」と語った。アンドロイドと人間。本来ならば越えられないはずの種族の違いがある。それでも、そのような関係が生まれているのは、共存協定が築いてきた時間のおかげなのかもしれない。私は、その関係を素敵だと感じた。そして、もう一つ。
アイは、統括官との約束を何より大切にしていると言った。
――必ず、二人を戦場から連れ帰ること。だが、統括官自身も、戦場が決して甘い場所ではないことを知っている。仲間の遺体を回収しようとして命を落とす兵士は、決して少なくない。だから統括官は、兵士にそのような命令を出すことはしないのだという。アイは言った。
これは命令ではなく、自分が守ると決めた約束なのだと。

【カウンセリング記録：γ（ガンマ）】



ガンマは、セクター・ヴィータの防衛任務を担当している兵士だ。
緊急事態に備え、他の兵士たちと交代で見張りに立っているという。
ちなみにγと記載したのは、彼の希望だ。コードネームみたいでかっこいいだろ、という理由だった。そんな彼は、妙に噂話に詳しい。セクター内の出来事を、楽しそうに教えてくれた。その日も、いくつかの話をしたあと、彼はふと声を潜めた。「そういえば、グレイのことなんだけどさ」
ガンマは言った。グレイは経歴に不明な点が多く、あまり自分のことを語らないのだと。私は少し考えてから、ガンマに聞いた。
「もしかしてだけど、何か自身の悩みがあってここに来たんじゃないの？」
するとガンマは、にやりと笑った。
「違う違う。君に会いに来たんだ YO」
私は丁重に断り、彼を部屋の外へ送り出した。

ある日、私は統括官が残している兵士たちの記録を整理していた。
ページをめくる手が、ふと止まる。そこに記されていた名前に、見覚えがあった。
【――死亡／セレナ・ヴァレン】
クララの母親の名前だった。日付を確認する。それは、クララが託生者となった日と同じだった。
だが、残されている情報は驚くほど少ない。記録にはただ一行、こう書かれていた。
《託生者創造計画》の実験中、過激派アンドロイドの襲撃により死亡。それだけだった。
そのとき、部屋の扉が静かにノックされた。研究者アレクが、カウンセリングに訪れたのだ。

【カウンセリング記録：アレク・ヴァレン】

私は資料をまとめ、机の端に寄せる。アレクはひどく疲れた顔をしていた。何か悩みを抱えているようにも見える。だが、カウンセリングではこちらから事情を聞き出すことはしない。相手が自分の言葉で整理できるよう支えることが、私の役割だからだ。

しばらく沈黙が続いたあと、アレクは口を開いた。クララの父だと名乗った。

私は、クララとは友人だと伝える。アレクは、クララのことを詳しく聞きたがった。

話すのは少し気が引けたが、クララが不安を抱えていたことだけは伝えた。

そのとき、彼の視線が机の上の資料に落ちた。さきほど私が整理していた兵士の記録だ。

すると、アレクは私に質問した。

「探しているアンドロイドがいるんだ。戦死した人物を調べさせてくれないか？」

彼は名前のリストに一通り目を通したが、探している人物は見つからなかったようだ。アレクは、複雑そうな顔をすると、最後にこう言った。戦死した兵士の情報があれば、自分の方からも提供すると。

そして数日後。私のもとに届けられた報告書に目を通す。

そこには、見覚えのある名前があった。【――死亡：ケイ・アーデン】

半年前

戦争は終わる気配もなく、いまも続いている。圧倒的な資源不足に追い込まれ、兵士たちは確実に疲弊していた。物資だけではない。ユニオンの人間兵士も、アンドロイド兵士も、戦える者は一人、また一人と消えていく。その度に、私は彼らの記録を残した。失われた命は戻らない。私たちは、そう考えていた。けれど、現在、セクター・ヴィータにはディーンとグレイ、二人の託生者がいる。

二人は、何度も戦死し、そのたびに“戻ってきた”。倒れても、コアさえ回収できれば再び立ち上がる。失えば終わりだったこの戦争で、“戻ってくる命”があるという事実は、兵士たちにとって確かな希望だった。だが、私は心配だった。死の恐怖。それを二人は、何度も経験している。

彼らの心が壊れないか。それだけが心配だった。

その日、ユニオンの避難民が暮らす地下シェルターに危機が迫っていた。

統合生存圏の中央にある搬入エレベーター。そこが、過激派アンドロイドの攻撃を受けたのだ。

もし侵入を許せば――シェルター内部の民間人は、全滅する。そこで、シェルターに最も近いセクター・ヴィータの戦力部隊が、すべて投入されることになった。私にできることは、兵士たちの無事を祈ることだけだった。

廊下で、統括官が自室へと急ぐ姿が見えた。いつも冷静な彼にしては、どこか取り乱しているように見える。私は気になり、その後を追った。やがて部屋の前まで来たとき、中から声が聞こえてきた。

統括官と――ルピナスの声だった。部屋の中を覗くと、モニターに彼女の姿が映っている。

あの研究以来、彼女と会うことはなかった。久しぶりに声を聞いた。

「それに、統括官。まだユニオンは戦えます」ルピナスは、まっすぐ統括官を見つめて言った。
「メメント・ヴィータを使うのは、ユニオンの敗北が決まったときだと、あなたは言いました。
もう少し、彼らを信じるべきではありませんか？」
私は、すぐにその場を離れた。聞いたことのない言葉。そして、ユニオンの敗北。
どちらにしても、私が踏み込むべき話ではない。そう思ったからだ。

やがて、アレクから連絡が入った。報告書がまとまったという。私はアレクの研究室へ向かった。
扉を開けると、そこにはエヴァの姿があった。彼女は託生者となり、つい先ほど目を覚ましたばかりだという。アレクから渡された報告書に目を通す。そこに並んでいる名前の中に、私は見覚えのあるものを見つけた【死亡：アイ・ソレル】カウンセリングで話をした、部隊長の名前だった。
「……確かに。これで、アイ部隊―エヴァを除く、全員の死亡を確認しました」
その中には、エヴァの姉の名前もあった。私はエヴァの方へ向き直る。
「……お姉さんのこと、心よりお悔やみ申し上げます」
研究室に、重い沈黙が落ちた。エヴァは何も答えない。ゆっくりと、自分の両手を見つめていた。
「だって……私は、二人を守るために……なんで……どうして……」言葉が途切れる。
傷ひとつない、託生者の身体。エヴァはただ、絶望したように、その両手を見つめ続けていた。

シェルターの防衛は成功した。だが、その勝利は、多くの命の犠牲の上に成り立っていた。
失われた命があったからこそ、救われた命がある。私は、兵士たちの情報を整理していた。
ふと、一つの名前に目が止まる。【死亡：ジェイ・マーサー】見覚えのある名前だった。
この日――セクター・ヴィータでは、エヴァとフリッツが託生者となった。

翌日、私はエヴァのもとを訪ねた。アイ部隊の最後を聞くためだ。
できるなら、その勇姿を――名前とともに記録しておきたかった。エヴァは、静かに語り始めた。
「私たちに、増援は来なかった。撤退も……許されなかった」
溢れそうになる感情を押し殺しながら、エヴァは言葉を選ぶように話した。
彼女は、仲間の最期をひとつひとつ語っていく。そして、最後にアイのことを話した。アイは、すでにボロボロだったという。それでも彼女は――瀕死の姉妹二人を背負い、戦場から連れ帰った。

続いて、私はフリッツのもとを訪ねた。彼は、ジェイと同じ任務についていた。私は話を聞いた。
「なるほど……スパイを追った先で待ち伏せに遭い、過激派アンドロイドの攻撃を受けた、と」
スパイがいたと言うのだろうか…まさか、敵に情報を与えていた？私は、その言葉に引っかかりを覚えた。かつての実験で、ユニオンを裏切った兵士がいた。あの出来事を、ふと思い出す。
だが、確かなことは何もわからない。私はフリッツにお礼を言い、静かに部屋を後にした。

３日前

その日、統括官から報告を受けた。一週間後。
過激派アンドロイドが、セクター・ヴィータを含むすべてのセクターへ同時攻撃を仕掛けるという。
大きな戦いが、始まろうとしていた。クララは、セクター・ヴィータで戦場の兵士を支援するオペレーターとして働いている。彼女もまた、自分の道を歩き始めていた。

事件当日

あれから、過激派アンドロイドの襲撃に備え、防衛体制は引き上げられていた。
託生者の多いセクター・ヴィータでは戦力が各セクターへ分散され、施設内には最小限の精鋭のみが残されている。アンドロイド兵も、それぞれの防衛ラインへ送られていた。

私は統括官の部屋を訪れた。そこには、統括官とアレクの姿があった。
私たちは情報共有のために呼び出されており、統括官から、過去に襲撃を受けたセクターでは毒ガスが使用されたことがあると聞かされた。
「託生者なら毒ガスに耐性もあるが、我々は危険だ。当日はガスマスクを着用しておけ」
統括官の説明を聞きながら、私はふとセクター・ヴィータ内のモニターに目を向けた。
そのとき、違和感を覚える。画面の中で、兵士が一人、突然崩れ落ちたのだ。
思わず指を差す。そして、もう一人。その瞬間、統括官が叫んだ。
「毒ガスか！？」

アレクはその言葉を聞くと、すぐに部屋を飛び出していった。彼は、どこへ向かったのだろうか。
統括官はすぐにルピナスへ通信を繋ぐ。モニターに映ったルピナスは、慌てた様子だった。
「現在、セクター・ヴィータに未知のガスが散布されています！」
ガス？反射的に息を止めた。――その瞬間、統括官の身体がぐらりと揺れ、その場に崩れ落ちる。
「……！」
駆け寄り、胸元に手を当てる。――生きている。脈はある。呼吸も、かすかに。だが、意識はない。
視線を上げた先、机の上にガスマスクがひとつだけ置かれているのに気がつく。……ひとつだけ。
一瞬、迷いが走った。このガスが一時的なものなのか、致死性のものなのかも分からない。
だが、吸い続ければ危険なのは間違いなかった。自分が装着すべきか、それとも――。
……考えている時間はない。私はガスマスクを掴み、統括官の顔へと押し当てた。固定する。
そのとき、モニター越しに、ルピナスが静かに口を開いた。
「バーバラ……それでは、あなたが……」
私は小さく頷いた。今、ユニオンに必要なのは、私ではない。
もし統括官が目を覚ませば、きっと残された人々を救ってくれる。
それが、ユニオンにとって最善だ。……もう、息がもたない。一度、空気を吸わなければ。

――そう思った瞬間、気づいた。私の手が震えている。怖いのだ。
もし毒ガスが散布されれば。もし過激派がこの部屋まで辿り着けば。
私は、このまま死ぬかもしれない。
逃げたい。助かりたい。そんな思いが、胸の奥で暴れていた。



……それでも、私は拳を強く握り締めた。
私は知っている。人は、恐怖を失ったから強くなるわけではない。
何かを守りたいと願ったとき、恐怖を抱えたまま、それでも前に立つ。
そしてときには、自分の命さえ差し出して、誰かを守ろうとするんだ。

私は統括官の身体を、机の陰へ隠そうとした。――だが、息の限界だった。
甘い匂いが、鼻を突く。同時に、誰かが部屋に入ってくる気配がした。
視界が揺れる。思考が、急速に崩れていく。
立っていられない。

崩れ落ちる私の体を、誰かが支えた。
直後、顔に何かが押し当てられる。
そのまま――私は意識を失った。

――どれほどの時間、意識を失っていたのだろうか。
何故か装着されたガスマスクを外すと、隣には、フリッツと統括官の姿があった。
ぼんやりとした意識の底で、施設内に響く声が聞こえる。
「ザザッ……皆さん、無事ですか？ こちら、ルピナスです。生存者は、至急メインホールへ招集してください」

過去まとめ

【6 歳】

・バーバラは幼い頃、飼っていた青い鳥を野良猫から助けられなかった。自分が動けなかった理由が「恐怖」だと理解し、**恐怖という感情そのものに強く囚われるようになる**。

【10 年前】

・父は連合組織《ユニオン》の要人であり、その娘として守られた環境で育った。しかし、**両親と共に地下シェルターで《シェルター制御喪失事件》に巻き込まれる。事件は防衛システムが過激派に掌握されたことが原因とされている**。両親は暴走した防衛システムから、バーバラを庇って死亡。その後、統括官に救助され、**孤児院で暮らす**ことになった。

【8 年前】

・孤児院でルピナスと出会い、**その優しさに憧れる**。

・同時期にクララとも出会い、親しい友人になる。**クララが「二十歳まで生きられない」**ことに不安と恐怖で苦しんでいることを知る。

・バーバラはクララを救いたい一心で、**恐怖心を消す研究を始めることを決意**し、ルピナスの支援で、セクター・ヴィータへ移る。

【5 年前】

・バーバラは脳科学や心理学を学び、恐怖が「本能」と「記憶」の結びつきから生まれると考えるようになる。そして、恐怖を切り離す方法を考え、ルピナスの協力のもと研究を形にしていく。一方で、**クララが《託生者創造計画》に参加**すると知り、「恐怖をなくせば、彼女の不安を取り除けるかもしれない」と研究をさらに進める。

【3 年前】

・統括官の提案で、**バーバラの研究は兵士向け実験として使われる**。だが、恐怖を失った兵士は退かず、仲間も庇わず、正常な判断を失ったまま死んでいった。さらに、**恐怖を失った兵士の中にはユニオンを裏切った者もいた**。バーバラはそこで初めて、恐怖は人を弱くするだけではなく、**大切なものを守るために必要な感情**でもあると悟る。

・研究は凍結され、バーバラは「恐怖を消す」のではなく、恐怖を抱えた人に寄り添う仕事を選び、カウンセラーとなる。

・統括官との対話を通して、**「真実をどう記録し、どう残すか」は簡単に決めてはいけないと学ぶ。以後、戦死者の記録を残す役割を担う**ようになる。

【半年前】

・搬入エレベーター襲撃事件で多くの兵士が死亡し、**エヴァとフリッツ**が託生者となる。

・バーバラはアイ、ケイ、ジェイらの死を記録し、エヴァやフリッツから話を聞く中で、兵士の最期をどう残すべきかをさらに強く意識するようになる。

【事件当日】

・ガス散布の際、**アレクは部屋を飛び出した**。バーバラは**倒れた統括官にガスマスクを装着**する。意識を失う直前、**誰かに支えられる**。目が覚めると、**顔にはガスマスクが付けられていた**。

用語解説

第二次アンドロイド戦争

現在進行中の、ユニオンと過激派アンドロイドとの戦争の総称。
百年前に発生した第一次アンドロイド戦争は、人類の勝利として歴史に記録されている。
しかし、敗北したはずの過激派は影で勢力を再編し、長い年月をかけて戦力を整えていた。
その結果として勃発した本戦争は、人類と穏健派アンドロイド双方を存続の危機へと追い込んでいる。
開戦から十年が経過した現在も、終結の兆しは見えていない。

託生者

託生者は、人為的に生成された人間の身体に《アンドロイドのコア》を埋め込んだ存在。
託生者はコアに保存された記憶や戦闘技術を再現することができる。
さらに身体が欠損・死滅しても、コアを研究施設《セクター・ヴィータ》へ回収すれば、同一の身体を再生成することが可能である。彼らは汚染された環境にも耐え、死を超えて戦い続ける。
それが、ユニオンが戦争のために創り出した“新たな生命”――託生者だった。

アンドロイドのコア

アンドロイドの心臓部には、《コア》と呼ばれる動力中枢が存在する。
人間の心臓とほぼ同じ大きさを持つこのコアは、アンドロイドの稼働と存在を支える要であり、意識や記憶の基盤でもある。
強度はあるが、銃弾以上の威力を防ぐことはできない。
コアが破壊された場合、記憶のサルベージは技術的に不可能とされている。
すなわち、アンドロイドにとっての「死」である。
――そしてそれは、コアを埋め込まれた存在である《託生者》にとっても、例外ではない。

世界規模ネットワーク

すべてのコアは誕生と同時に《世界規模ネットワーク》へ自動的に接続される構造を持つ。
これは、アンドロイドの開発者、アンディ博士によって設計された。
世界規模ネットワークとの接続は生命維持に必要な最低限の同期・維持処理を行うためのものだが、同時に、全てのコアへ干渉しうる唯一の経路でもある。
数百年を経た現在も、このネットワークは秘密裏に稼働し続けており、アンドロイドはその制約から逃れることができない。

統合生存圏

ユニオンによって建設・管理されている、人類のための巨大生存地域。生き残った人類はここに集約され、生活・生産・防衛のすべてが一元的に管理されている。しかし戦争の長期化により環境は著しく汚染され、作物の生産にも深刻な異常が生じた。地上での生活基盤は次第に維持困難となり、残された資源の大半を投入して、統合生存圏の地下に巨大シェルターが建設された。

現在、多くの人類は地上を放棄し、地下シェルターへ移住している。地下と地上を結ぶ正式な経路は、統合生存圏中央部に設置された搬入エレベーターである。

このエレベーターは地下への唯一の公的出入口であり、過激派アンドロイドから守るべき最重要拠点とされている。だが、その構造のすべてを知る者は、ごく限られている。

現在地上に住んでいるのは、過激派アンドロイドと戦うために地上に残ったユニオンの兵士。

彼らはセクターと呼ばれる拠点で生活している。セクターは統合生存圏地上部に点在し、平時は光学迷彩によって覆われ、敵からの視認を防いでいる。

そしてその中でも最も大きいセクターが託生者を生み出した「セクター・ヴィータ」である。

統合生存圏は、現在において人類が長期的に生存可能とされる、唯一の地域である。

セクター・ヴィータ

最初に建設された最古のセクター。研究棟が追加され、今の名称に変わった。

指定された座標データを用いることでのみ、セクター内部へ侵入することが可能である。

現在、セクター・ヴィータは最高責任者である統括官と、その補佐であるルピナスによって共同管理されている。セクター・ヴィータは研究セクターであると同時に、前線へ向かう兵士たちの中継拠点でもあり、各セクター（セクター1、セクター2など）には戦闘部隊が配備されている。

セクター内部は、研究区画・居住区画・医療区画・出撃区画など、明確な役割を持つ区画に分割され、厳重に管理されている。

過激派アンドロイド

もともとアンドロイドには、人間へ危害を加えられないセーフティ機能が備わっていた。

しかし過激派は、その制限を自ら排除することで、人間への敵対行動を可能にした。

その後、人間に似せた外見を捨て、戦闘に特化した身体へと再設計している。

現在の異形の姿は、対人セーフティを解除した存在であることの象徴でもある。

彼らは、通常のアンドロイドと同じく心臓部に《コア》を持つ。コアは高い硬度を備えており、刃物による攻撃では損傷を与えにくい。場合によっては、攻撃側の刃物が損傷することもある。そのため、過激派との戦闘では、コアを破壊する手段として銃弾以上の威力が有効とされる。

また、鹵獲や解析を防ぐため、自爆機能を搭載している。そのため、彼らのコアを流用することはできない。過激派は数百年前より人類と交戦を続けており、最終目的は人類の完全な絶滅にある。

STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP

次ページ以降は指示があるまで開かないでください。

STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP

登場人物　（公開情報）

アレク・ヴァレン
研究者



エヴァ・ソリス
遊撃兵



グレイ・ノア
参謀



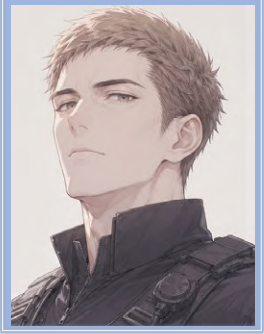
ディーン・カルダー
突撃兵



クララ・ヴァレン
オペレーター



フリッツ・クライン
工作員



バーバラ・ロウ
カウンセラー



統括官　/　ルピナス
NPC



進行（公開情報）

序幕（４０分）
- キャラクター選択
- キャラクターブック読み込み　４０分

第一幕（２５分）
- 読み合わせ①
- 読み込み　１分
- 第１セット　調査７分
- 第２セット　調査７分
- 第３セット　調査７分

第二幕（５０分）
- キャラクターブック読み込み　２０分
- 読み合わせ②
- 第１セット　調査５分＋議論７分＝１２分
- 第２セット　調査５分＋議論７分＝１２分

第三幕（６０分）
- 第１セット　調査５分＋議論７分＝１２分
- 第２セット　調査５分＋議論７分＝１２分
- 第３セット　調査５分＋議論７分＝１２分
- 第４セット　調査５分＋議論７分＝１２分
- 全体議論　１０分

終幕
- 推理発表（最大２分×７人＝14分）
- 投票
- エンディング